

漂着ごみの発泡スチロールを燃料に変えて再利用する「宝の島プロジェクト」が23日、喜界島で公開された。プロジェクトは、(社)日本海難防止協会が取り組んでいる住民参加型

の社会実験。奄美でも毎年、大量のごみが流れ着いて問題となっており、漂着ごみを地域資源に逆利用する取り組みが注目を集めた。

「宝の島プロジェクト」喜界島で公開

漂着ごみを地域資源へ

季節風や潮流によって海岸に漂着するごみは景観だけでなく、生態系に悪影響を及ぼしている。離島自治体では回収の労力や焼却処理の負担も大きい。同協会は、離島共通の漂着ごみ問題の解決と地域振興を視野に日本財団の支援を受けて2009年度から2年間、沖縄・竹富町鳩間島をモデル地区に住民主導の宝の島プロジェクトを展開した。

同島では発泡スチロールを油化装置で加熱、分解して可燃性のスチレン油を抽出し、ディーゼル機関やボイラー、焼却炉の燃料に再利用してきた。装置を1日8時間稼働させると、発泡スチロール約90キロで約60リットルの油を抽出できるといふ。

同協会は、大きな島や複数の島を抱える自治体も対応しやすいように移動式の油化装置を開発。11年度はこの装置を使って国内離島を巡回する離島キャラバンを行う。喜界島での公開実験はその第一弾。喜界町、障がい者の支援で発泡スチロールの回収活動をしているNPO法人ユアアイ自立支援の会などが協力した。

発泡スチロールの油化 再利用



油化装置で発泡スチロールからスチレン油を抽出し、発電に利用する公開実験＝23日、喜界町湾の町役場

公開実験は町役場敷地内であった。町内の小学生も参加し、①トランクに搭載された油化装置に発泡スチロールを投入②15分程度で抽出したスチレン油で発電して綿菓子やかき水を作る」といった内容。小学生らは「エコ縁日」も楽

しみながら夏休みの環境学習にもつなげた。
同協会の大貫伸・主席研究員(53)は「キャラバンで、ごみの回収から再利用まで地域に合ったシステムを提案し、離島振興にも役立てたい」と話した。8月には奄美大島でユアアイ自立支援の会と連携して検証型実験を行い、障がい者の自立支援促進の方策も探る。